ポスター・チルドレン問題と隠蔽される他者
―レヴィナス、デリダ、ヴァン＝マーネンの他者論を通じて―

南学正仁

はじめに

ポスター・チルドレンという言葉は、日本人には耳慣れないものかもしれない。欧米には「テレソン」と呼ばれる種類のチャリティ番組がある。多数の有名人がノーギャラで出演し、長時間にわたってトークやライブ演奏を行い、障害者への寄付を募るという内容だ。このテレソンにおいて、障害者を代表して画面に登場し、寄付を呼びかける子供たちが「ポスター・チルドレン」である。ポスター・チルドレンは障害者のために多額の寄付を集める反面、その問題点も指摘されている。本論文では、ポスター・チルドレンをめぐる問題点を紹介し、考察を加える。

本論文の構成は以下の通りである。

最初に、ロングモアやコーエンを援用しながら、ポスター・チルドレンの歴史を概観し、ポスター・チルドレンがどのような問題を孕んでいるのかを説明する。ついでレヴィナスの「顔」概念を概説したのち、レヴィナスの概念を用いてポスター・チルドレンをめぐる問題のいくつかに説明を与える。

次に、レヴィナスの影響を受けた二人の思想家、デリダとヴァン＝マーネンによる他者論を概観する。レヴィナス、デリダ、ヴァン＝マーネンの思想とポスター・チルドレン問題を比較し、考察することで、目の前の他者からの呼びかけに応える際、目の前の他者とは異質な他者からの呼びかけは隠蔽されてしまうこと、また、この点を従来の論者たちが論じ残してきたことを明らかにする。

1．ポスター・チルドレンの歴史と問題点

ロングモア（2013）は、アメリカにおけるポスター・チルドレンの歴史を振り返り、ポスター・チルドレンの使用が孕む問題点を指摘した。ポスター・チルドレンのイメージはディケンズの『クリスマス・キャロル』にまで遡ることができる。この物語に、ちびのティム（Tiny Tim）という子供が登場する。彼は強欲な商人スクルージのもとで薄給で働くクラチット氏の、幼い息子であり、病弱で足が不自由である。クリスマス・イヴの晩にスクルージが見た未来の幻影の中では、ティムはすでに死んでしまっていた。幻影の中で少年の墓を見ることで、貪

欲で利己的な商人だったスクルージは悔い改め、目覚めた後にクラチット一家への援助を行うのである。

ちびのティムのイメージは一種のシンボルとなり、テレソンにおいては繰り返し用いられてきた。いわば、番組のホストはクリスマスの精霊やクラチット氏にあたる存在であり、ポスター・チルドレンはちびのティムなのだ、とロングモアは言う。そして、「スクルージになってしまうかもしれなかった視聴者は、テレビのスクリーンをのぞくことで、かわいそうなティムに心を開けば、自分もクラチット一家の仲間入りできるのだと学ぶのである」（Longmore 2013: 34）。

西洋の歴史を通じて、障害を持った、あるいは病に侵された子供のイメージは、チャリティの中心的なイメージとなってきた。コーエン（2002）によれば、初期近代のイギリスで寄付の対象として人気があったのは小児病院であった。「寄付者たちは寛大に支援を与えたが、その時々で特に欠乏しているところに与えるというよりは、大衆の関心を集めている機関に与えた。かくして、性病を治療している病院よりも、小児病院に対して頻繁に寄付がなされた。実際にそのとき緊急に支援を必要としていたのは、前者の方だったのだが。寄付者たちは、前者に対して寄付をすることで悪徳や放蕩を後押ししていると見られ、自分の評判に傷がつくことを恐れたのである」（Cohen 2002: 393）。このように子供を罪のない存在とする見方は、性病患者との対比の上だけではなく、大人一般との対比においても見られる。子供を、無辜で守られるべき存在であるとする見方は、キリスト教の伝統によるものだが、とりわけ16、17世紀以降、子供が小さな大人ではない、独自の特徴を持った存在として見られるようになったことにより、広く一般に受け入れられた見方となっていった（コンラッド，シュナイダー2003）。このように、子供は無辜の被害者として見られ、支援の対象となってきた一方で、成人への支援は後回しになっていた。「子供は、いつでもチャリティの対象として人気があった。一方で老人たちは、二十世紀に公的年金制度が確立されるまでは深刻に支援を必要としていたにもかかわらず、個人のチャリティを受け取ることはほとんどなかったのである」（Cohen 2002: 393）。

ロングモア（2013）は多くの実例を示しつつ、チャリティの宣伝に使われてきたイメージが子供のものであったことを指摘している。1932年に行われたポリオのためのキャンペーンのポスター、1934年にデザインされた、不具者のための寄付を募る切手、同じく1934年の、足の不自由な人々へのチャリティとしてのダンスパーティーの宣伝用写真には、いずれも子供のイメージが用いられた。そして1946年に新米国小児まひ基金（the new National Foundation for Infantile Paralysis）が制作した映画 *The Crippler* には、史上初のポスター・チャイルドが登場し、寄付を呼びかけた。子供のイメージを使うという戦略は、20世紀の後半には、広く知

られたものとなっていた。1986年に開かれた、テレソンを成功させるためのワークショップでは、イースター・シールズ（米国の有名慈善団体）の幹部たちの「子供の方が、大人よりも多くの金を稼ぎ出すことができる」とする発言が記録されている。「子供たちは効果的な募金の道具だ、と彼らは説明した。なぜなら、大衆は「最も弱い」もののイメージに共感するからだ、と」（Longmore 2013: 36）また、政治家がイメージアップのために障害者と会う場面でも、登場するのは子供ばかり――テレソンに出演したポスター・チルドレンとの会談が典型的だ――である。このように、障害者への寄付を呼びかける際には、障害を持った大人のイメージは使われず、専ら子どものイメージが用いられてきた。

ポスター・チルドレンには、さらにいくつかの偏向がある。宣伝に使われやすい性別があり（ただし、団体によって、どちらの性別が募金を集めやすいかの意見は分かれる）、黒人よりも白人が使われやすいといった具合である。また、ポスター・チャイルドを選ぶ際には、容姿に注目した選定がなされる。美しい容姿を持った患者の方が同情を集めやすい。ポスター・チャイルドに選ばれれば、多額の出演料が手に入るため、親たちがやっきになって子供たちをアピールするという現象が起きている。さらに、あまりに重い障害を持った患者では、視聴者が目を背けてしまう。「彼らは無力に見えなければいけないが、あまりに重い障害を持っていてもいけない」（Longmore 2013: 37）のである。まとめれば、白人で、特定の性別の、美しく、障害の重すぎない子供という、恣意的に選定されたイメージが障害者のイメージとして発信されてきたのである。

このように恣意的に選ばれたポスター・チルドレンは、ビジネス・法・医療といった様々な分野において、障害者像の形成に大きな役割を果たしてきた。「それ［ポスター・チャイルドというアイコン］が、障害を持ったアメリカ人が本当は誰なのか、そして彼らが本当に必要としているものは何なのかを定義した。（…）二十世紀後半のアメリカでは、ちびのティムという人格が、文化的、社会的、政治的に障害の意味を形成する際の中心にあったのである」（Longmore 2013: 38）。

ポスター・チルドレンの歴史と問題点を簡単にまとめておこう。西洋の歴史において、障害を持った子供のイメージは、同情を、そして資金を集める道具として、頻繁に用いられてきた。そのために障害を持った大人が無視され、適切な支援を受けられないという事態も生じた。また、現代のアメリカにおいては、障害者像として大人のイメージが選ばれることは少なく、典型的な障害者像として公の場に登場する子供でさえも、容姿や障害の重度、性別や人種によって恣意的に選定されている。現代アメリカの、障害者をめぐるビジネス・法・医療の整備などの様々な面で、恣意的に選定された特定の種類の子供のイメージが、障害を定

義する際に大きな影響を与えてきたのである。

2．レヴィナスの「顔」

画面の向こうから我々を見つめ、彼らのための寄付を呼び掛けてくるポスター・チルドレンの姿は、レヴィナスが自身の哲学を構築する際に基底をなす概念とした「顔」（le visage）を思い起させる。本節では、レヴィナスの「顔」について概説し、ポスター・チルドレンについて、レヴィナスを援用して説明することを試みる。

テレビの画面を通してポスター・チルドレンが視聴者を見つめ、救いを呼びかけるという構造は、レヴィナスの論じた他者との出会いの状況と類似している。

レヴィナスによれば、他者と顔を合わせた瞬間、たとえ言葉を交わさずとも、私は他者からのメッセージを受け取ってしまう。たとえば冬空の下、物乞いの側を通りかかったとき、物乞いと視線が合ったとしよう。このとき、私は物乞いを無視することもできる。しかしそれでも、物乞いが助けを必要としているというメッセージは、すでに私に伝達されてしまったのである。他者の顔を見てしまったとき、たとえ他者が何も言わなくとも、他者の呼びかけは私に届いている。顔を合わせた時点で、私はもう、他者からの呼びかけをなかったことにすることはできないのである。レヴィナスはこの事実を、次のように説明する。「みずから表出する存在は、みずからを押しとおしてくる。とはいえそれはまさに、その悲惨と裸形によって――飢えによって――私に訴えることによってであって、私はその訴えに対して耳を塞ぐことができない」（Lévinas 1990: 219; 邦訳 44. 訳文は熊野訳による）。レヴィナスは、こうした他者から私への呼びかけの根本を成すメッセージを、ユダヤ教の律法の本質でもある、「あなたは殺してはならない」（Lévinas 1990: 217; 邦訳 41. 訳文は熊野訳による）というものであると考えていた。

顔を見ることで他者の訴えを聞いてしまった私には、その呼びかけに対する責任（＝応答可能性）（la responsabilité）が生じる。他者の訴えに対して、私は耳を塞ぐことができないのだから、「この責任は回避不能である」（Lévinas 1990: 220; 邦訳 46. 訳文は熊野訳による）。顔によって、私は不可避に（irrécusable）責務を負わされてしまうのである。

まとめておこう。レヴィナスは、「顔」という概念を用いて、私と他者との出会いを描写した。他者は、無防備で赤裸々な顔を曝すことで、私に「あなたは殺してはならない」と呼びかける。他者の顔を見たとき、私はその呼びかけから逃れることはできない。他者の顔を見た時点で、私はその呼びかけを聞き、その呼びかけへの責任（＝応答可能性）を負わされるのである。

ポスター・チルドレンの視聴者に与える効果は大きく、多額の寄付が集まる。

なぜ、ポスター・チルドレンはこれほどまでの効果を発揮するのだろうか。これについては、責任の不可避性の観点から説明することができる。他者の顔と向き合ったとき、私はその時点で、彼らの呼びかけへの責任（＝応答可能性）を負わされるのであった。画面越しにポスター・チャイルドの顔と向き合った私は、彼の呼びかけに対して不可避に責任（＝応答可能性）を負ってしまう。私は、彼らの呼びかけに対して、どうしても応えなければならない。一番シンプルであり、そして求められている応答は、寄付をするということである。この責任（＝応答可能性）の不可避性によって、ポスター・チルドレンは多額の寄付を集めるのである。

次に、なぜ子供が障害者の代表的イメージとして用いられるのかという問題を考えてみたい。慈善団体のメンバーは、子供を広報に起用する理由について、次のように説明していた。「子供たちは効果的な募金の道具だ、と彼らは説明した。なぜなら、大衆は「最も弱い」もののイメージに共感するからだ、と」（Longmore 2013: 36）。レヴィナスは、顔について論ずる際、貧しい者、異邦人、寡婦、孤児といった表現によって、それを特徴づけた。「顔は、顔が裸形であることにおいて、貧しい者と異邦人が困窮していることを私に提示する」（Lévinas 1990: 234; 邦訳 74. 訳文は熊野訳による）。貧しさ、そして欠乏こそが、顔が私に訴えかけてくる際の、最大の特徴なのである。「とはいえそれはまさに、その悲惨と裸形によって――飢えによって――私に訴えることによってであって、私はその訴えに対して耳を塞ぐことができない」（Lévinas 1990: 219; 邦訳 44. 訳文は熊野訳による）という一文を思い起こしてみよう。責任の不可避性は、他者の悲惨さと密接に結びついている。障害者であり、その上に、子供であることは慈善団体のメンバーが言った通り、この上ない弱さのイメージとして（彼らの言葉を借りれば、「「最も弱い」もののイメージ」として）用いられる。つまり、子供を用いることは、顔からの訴えの内にある、貧しさや欠乏といった要素を強調し、それによって責任の不可避性をより強いものにするのである。

このように、レヴィナスの「顔」の概念は、ポスター・チルドレンをめぐるいくつかの問いを考える手がかりを与えてくれる。しかし、ロングモアが取り上げた事態、つまり、西洋の歴史において、子供が手厚い支援を受ける一方で、大人が無視され適切な支援を受けられなかったという事態や、現代のアメリカにおける障害者像を一部の選定された子供たちが決定してきたという事態は、未だ十分な説明がなされぬままに残されている。これはいわば、子供の「顔」ばかりが人々に対して現前した結果、人々は子供からの呼びかけには応じる一方で、大人からの呼びかけには応じなかったという問題である。ロングモアが指摘した事態について考えるために、レヴィナスを批判的に継承したデリダ、そしてデリダを

再批判し、レヴィナスを忠実に継承したヴァン＝マーネンの二名による他者論を、続く二つの節で概観する。彼らが論じるのは、目の前にいない他者からの呼びかけに応えることができないことの痛みである。二人の議論を概観することで、彼らの議論とポスター・チルドレンの提起する問題の共通点、そして相違点を明らかにする。

３．『死を与える』におけるデリダの他者論

レヴィナスのよき理解者であり、批判者でもあったデリダもまた、他者と向き合うときの責任について語っている。『死を与える』でのデリダは、イサクの燔祭を主題に据えているという点において、キルケゴール『おそれとおののき』やパトチュカ『異教的試論』を明示的に継承している。しかし、デリダは冒頭からパトチュカに触れながらも、「後のレヴィナスを思わせる口調で、パトチュカは聖なるものの経験や融合的な熱狂に警告を発するのだ」（Derrida 1990: 15; 邦訳 10. 訳文は廣瀬訳による）とレヴィナスに言及しており、第四章では明示的にレヴィナスとキルケゴールを比較していることからも、彼がキルケゴールやパトチュカだけでなく、同時代人レヴィナスを踏まえていることは明らかであろう。

この論文の主題となっているイサクの燔祭は、旧約聖書の『創世記』第22章において語られる逸話である。アブラハムは、妻サラとの間に子供ができないことに悩まされていたが、年老いてからやっと息子イサクをもうけた。アブラハムは一人息子のイサクをたいそう可愛がった。しかし、神はアブラハムに、愛する一人息子であるイサクを連れてモリヤの山にのぼり、そこで彼を生贄に捧げるように告げる。アブラハムは息子と共に、神が示した場所へと出かける。アブラハムとイサクはたきぎを集め、火をつける準備をする。イサクは父に、「火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」と問い、アブラハムは息子に、「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」と応える。アブラハムは息子イサクをしばり、たきぎの上に載せ、そして刃物を振り上げて彼を殺そうとする。そのとき、神の使いがアブラハムに呼びかけ、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」と、彼をおしとどめるのである。アブラハムが後ろを振り向くと、やぶに一頭の雄羊がひっかかっており、アブラハムはその羊を神へのいけにえとして捧げる（日本聖書協会1955）。

デリダによれば、この逸話における神は、私に呼びかける他者を表している。「神とは他者としての、そして唯一のものとしての絶対他者の名である（一にして唯一のアブラハムの神）」（Derrida 1990: 97; 邦訳 141. 訳文は廣瀬訳による）。

しかし、神という他者からの呼びかけに応えるためには、他の他者からの呼びかけを犠牲にしなければならない。他の他者とはこの場合、息子イサクのことであり、呼びかけとは、つまり「わたしを殺さないでください」という呼びかけのことである。「私が他者の呼びかけや要求や責務さらには愛に応えるためには、他の他者を、他の他者たちを犠牲にしなければならない」(Derrida 1990: 98; 邦訳 142. 訳文は廣瀬訳による)。かくして、アブラハムは、神の呼びかけに応えるためには、イサクを犠牲に、文字通りいけにえにしなければならないことを知るのである。「他者との関係、他者の視線や要求や愛や命令や求めとの関係に入ってしまうと、私は次のことを知る。倫理を犠牲にすることなく、すなわちすべての他者たちに対しても同じやり方で、同じ瞬間に応えるという責務を与えるものを犠牲にすることなく、それらに応えることができないことを」(Derrida 1990: 98; 邦訳 142-3. 訳文は廣瀬訳による)。ある他者の要求に応えるとき、私はその人以外のすべて他者からの要求を無視しているのだ、とデリダはいう。

これは、なにもアブラハムだけの問題ではない。我々は、一つの瞬間に一人の他者の呼びかけにしか応えることができない。我々全員が、何気なく暮らしている中で、つねに、他の多くの他者たちを犠牲にしているのである。「あれこれと例を探すのはやめよう。あまりにも多すぎる。一歩進むごとに、一つの例がある。たとえそれに時間をかけ、注意を払ったとしても、いまこの瞬間にしていることのほうを選ぶことによって、そして自分の仕事、市民としての活動、教師としての、職業としての哲学の活動を選ぶことによって、たまたまフランス語である公用語を書き、話すことによって、私はおそらく義務を果たしているのだろう。だが他のすべての責務をおのおのの瞬間に裏切り、犠牲にしている。私が知らない、あるいは私が知っている他の他者たち、飢えや病のために死ぬ無数の「同類」たちを犠牲にしている(同類たちよりさらに他者である動物たちについては言うまでもない)」(Derrida 1990: 99; 邦訳 143-4. 訳文は廣瀬訳による)。このようにデリダは、彼自身もまた、あらゆる瞬間に無数の他者を犠牲にしているのだと語る。

さて、ここでデリダが論じている事態は、ポスター・チルドレンにまつわる問題、すなわち、子供の「顔」ばかりが人々に対して現前した結果、典型的な障害者像が一部の子供のイメージにしたがって決められてしまい、大人に対する支援が後回しになってきたという問題と同じものだろうか。この問いに答えを出す前に、デリダを批判したヴァン＝マーネンの議論を見てみることにしよう。

4．ヴァン＝マーネンによる「顔のないものへのケア」論

ヴァン＝マーネン(2000)は教育責任の問題を論じる中で、デリダを批判し、

レヴィナスを基本的には忠実に継承しながら、「顔のないものへのケア」（Caring for the faceless）という独自の議論を組み立てた。

ヴァン＝マーネンが問題とするのは、教育の場面において、親や教師が子供と向き合う際の悩みである。親や教師は子供と向き合い、彼らをケアする。しかし、親や教師が向き合い、ケアできる子供は同時に一人だけである。教師は、ある子供をケアする際、同じようにケアを求めている数多くの子供と向き合うことを放棄している。たとえ教師が有能であり、クラス中のすべての子供と順番に向き合い、ケアすることができたとしても、世界中のすべての子供たちからの呼びかけに応えることは到底不可能である。これはまさに、デリダが『死を与える』において論じていた問題である。

ヴァン＝マーネンは『死を与える』におけるデリダの議論を、以下のように説明する。イサクの燔祭におけるアブラハムは、特定の他者への責任と、一般的な義務の感覚の間で引き裂かれている。ヴァン＝マーネンの読解によれば、デリダは次のような脱構築的な戦略を用いてこの問題に答える。たしかに、我々は無数の他者からの呼びかけに心を向けなければならない。しかし、その呼びかけに応えることなどできないのだから、我々はこれに応えることに常に失敗し続けるよう、あらかじめ定められているといえる。ならばなぜ、我々はそれについて心を痛める必要があるのだろうか。

以上のようなデリダの考え方について、ヴァン＝マーネンは、教師としての感覚からよく理解できるものであり、賛成しなければならないかもしれないと譲歩しつつも、次のような批判を展開する。「デリダのアプローチの問題点は、ケアの対象との遭遇という前反省的な事態を脱構築する際に、すでに言語と倫理の領域へと逃げてしまっていることだ。問題は、日常において、他者からの呼びかけの経験、「心配としてのケア」の経験は、いつでも偶然的で個別的なものだということなのだ。それは誰にでも、どこでも、いつでも起こりうることがらなのだ」（Van Manen 2000: 324）。また別の箇所で、ヴァン＝マーネンは、デリダの問いについて、「問題は、これがすでに知的な問いになってしまっているということだ。宗教的、倫理的な問いといってもよいかもしれない」（Van Manen 2000: 324）とも述べている。ヴァン＝マーネンが問題視しているのは、無数の他者に対して応答できないことを、仕方ないものとして受け入れてしまうデリダの態度である。たとえ無数の他者に対して応答できないとしても、その事実を受け入れることができずに痛みを感じ続けることこそヴァン＝マーネンには重要なのであり、その痛みを「言語と倫理の領域」へと回収してしまおうとするデリダの試みは、彼にとっては受け入れがたいものなのである。

無数の他者からの呼びかけに応答できない痛みを感じながら、いま目の前に現

前している子供への呼びかけに応答することによってのみ、我々は無数の顔のない他者、つまり、いま目の前に現前していない子供に対する責任に応えうるのだとヴァン＝マーネンは主張する。「教師は、自分自身が気がかりに思っている特定の生徒の「顔」によって呼びかけられていると感じるからこそ、自分が責任を負う、ときに「顔のない」、他の無数の生徒たちに対して敏感でいることができるのである。（…）特定の生徒への責任の感覚に心を向けつづけることによってのみ、我々は、プロフェッショナルな倫理的実践のうちに、あらゆる観点から我々の職に必要とされる、普遍的なケアの責任を持ち込むことができるのである」（Van Manen 2000: 326）。ケアを必要としている特定の子供に向き合うことによって、教師は他の無数の子供からの呼びかけに応えることができるとヴァン＝マーネンはいうのである。

上記のようなヴァン＝マーネンの思想は、基本的にはレヴィナスを忠実に継承した考え方だといえる。レヴィナスは、私と他者との関係における第三者の位置づけについて、以下のように考えていた。私が、私の目の前の特定の他者に対して贈与を行うとき、私は単にその人に贈与しているのではなく、その人において現前している人類全体に対して贈与しているのだ。「顔の現前――＜他者＞という無限なもの――とは、困窮していることであり、第三者の現前（言い換えるなら、私たちを見つめるすべての人間の現前）であって、命令することを命じる命令である」（Lévinas 1990: 234; 邦訳 74. 訳文は熊野訳による）。つまり、私が、私を見つめる他者からの呼びかけに応えるとき、他者の内には第三者が、「私たちを見つめるすべての人間」が現前しているというわけである。ヴァン＝マーネンの考えは、以上のようなレヴィナスの考えを継承し、発展させたものだといえる。

簡単にまとめておきたい。デリダは、イサクの燔祭の逸話を論じて、ある他者（神）からの呼びかけや要求に応えるためには、他の他者（イサク）を犠牲にしなければならないと指摘した。デリダによれば、このような事態は、我々の日々の生活の中でつねに生じており、我々は絶えず、他の他者を犠牲にし続けているのだった。ヴァン＝マーネンは、目の前にいない他者をケアできないことの痛みを、仕方ないものとして受け入れてしまおうとしているとしてデリダを批判した。ヴァン＝マーネンによれば、このような痛みをつねに感じ続けながら、目の前の他者と向き合うことによってのみ、我々は無数の他者からの呼びかけに応えることができるのであった。

5．デリダ、ヴァン＝マーネンとポスター・チルドレン問題

デリダやヴァン＝マーネンによる、目の前にいない他者をケアできないことをめぐる議論は、ポスター・チルドレンにおける問題、すなわち、障害や病を持つ

子供を支援する一方、障害や病を持つ大人への支援は遅れてきたという問題、そして一部の子供たちのイメージによって障害者像が決められてきたという問題に、どのように適用できるだろうか。

デリダやヴァン＝マーネンが論じている問題も、ポスター・チルドレンの問題も、自分が支援している他者以外の他者を支援していないことを問題にしているという点で、類似している。しかし、私はむしろ、ここで両問題の相違点に目を向けることで、ポスター・チルドレン問題の性質を浮き彫りにしたい。

イサクの燔祭でのアブラハムは、犠牲にしなければならない他者イサクの存在を明白に認識し、彼を犠牲にしなければならないことに苦しんでいた点に注目しよう。これは、ポスター・チルドレンの問題とは異なる点である。恣意的に選定された一部の子供たちのイメージに従って障害が定義されてしまうとき、障害を定義する者たちは、選ばれなかった障害者たち（典型的には大人の障害者）の存在を認識し、彼らを支援できないことに苦しんでいるだろうか。否、むしろそのような意識がなかったからこそ、選ばれなかった障害者たちを抜きにして障害者のイメージが形成されてしまったのである。つまり、ポスター・チルドレンをめぐって問題となっているのは、障害を持つ子供という他者が目の前にいることによって、障害を持つ大人という他者の存在が忘れられ、覆い隠されてしまうという事態なのである。

また、ヴァン＝マーネンが、ケアできない無数の生徒たちに言及するとき、それらの生徒たちは、子供であり、生徒であるという点において、いま教師の目の前にいる生徒と同一の属性を持ち、その延長線上にいる存在である。ここで言及されている無数の他者とは、目の前の他者と同じような、無数の子供たち、無数の生徒たちのことであった。しかしポスター・チルドレンをめぐっては、逆にケアされる者とされない者の属性の相違が問題になる。子供が目の前にいるとき、大人へのケアは覆い隠されてしまうというのが、ポスター・チルドレンをめぐる問題なのだから。

デリダやヴァン＝マーネンが論じた、目の前にいない他者からの呼びかけに応えることができない痛みとは、あくまで、目の前にいる他者と同質の他者、私が想像することのできる他者を想定したものであった。ポスター・チルドレンのケースで喩えれば、目の前のポスター・チャイルドの呼びかけに応え、寄付をするとき、たとえここで寄付をしたとしても、世界各地にいる、無数の障害を持った子供たちからの呼びかけの全てに応えることはできないのだと思い、感じる痛みである。しかしロングモアが指摘した問題は、目の前のポスター・チャイルドの呼びかけに応えるとき、私たちは、大人の障害者もまたこの世には存在し、彼らも私たちに向けて呼びかけているという事実を認識し損なってしまうという問題

であった。私たちは、障害を持った無数の子供たちの呼びかけ全てに応えることはできないという痛みを感じる一方で、往々にして、障害を持った大人たちの呼びかけには気づかず、その呼びかけに応えられないという痛みすら認識しないのである。子供の障害者が多額の寄付を集める一方で、大人の障害者の存在が往々にして見失われてきたという事実は、このような、いわば「隠蔽される他者」の存在を示唆している。人が、目の前の他者からの呼びかけに応えるとき、目の前の他者と異なる属性を持つ他者については、その存在は覆い隠されてしまう。ポスター・チルドレンのような、共感を集めやすい容姿のすぐれた子供を障害者の代表として扱うことは、健常者にとって都合のいい障害者像の形成を後押しし、健常者にとって都合の悪い障害者の存在を隠蔽してしまうのである。

ここまでで論じてきた「隠蔽される他者」の問題は、ポスター・チルドレンに限らず、障害をめぐる文脈で広く見られる。最後に、その例をいくつか見てみることにしよう。ウェンデルは障害者の定義について論じる中で、正されなければならない誤解として、次のようなものを挙げている。「たとえば、多くの人にとって典型的な障害者とは、事故によって怪我を負ったが、それでも運動を続けようとがんばる、若くて元気のいい、まひのある男性だ。あるいは、教育によってハンディキャップを「克服し」、専門的に活躍している、若くて元気のいい、盲目の女性だ」（Wendell 1997: 12）。実際には、（カナダ・アメリカ・イギリスでの）障害の主要な原因は、関節炎やリュウマチ、心疾患やパーキンソン病、高血圧やてんかんであり、障害者の多くは老人、病人である。それにもかかわらず、若者の身体障害者が典型的な障害者像となってしまっており、老人や病人、知的障害者や精神障害者は典型的な障害者像からは除外されてしまっている。

各国の障害者政策では、長らく子供や身体障害者が主な対象とされてきた。たとえばアメリカの初期の障害者政策は、傷病船員の救済に関する法律（1798年）や、視覚障害児学校の設置（1812年）、ろう児学校の設置（1817年）であり、これらの政策の対象は身体障害者や子供たちであった（日本障害者雇用促進協会2001）。また日本においても、1987年の法改正までは、障害者雇用は「身体障害者雇用促進法」という法律によって定められており、専ら身体障害者を対象としていた。1987年の法改正で法律名が「障害者の雇用の促進等に関する法律」に改められ、すべての障害者が法の対象となった。この法改正により知的障害者の雇用は改善されたものの、精神障害者の雇用には依然として障壁があった。手塚（2000）は当該改正を評して、「このことは従来の身体障害者中心の施策からすべての障害者への拡大を意味するものでしたが、特に精神障害者への施策の格差は大きく、実質的にはすべての障害者を法の対象として位置づけ、拡大するということには到底なりませんでした」（手塚2000）と述べている。障害者雇用政策の

対象が身体障害者中心であり、その傾向が1980年代以降改められようとしてきたという傾向は、日本に固有のものではない。先述の法改正にも影響を与えたILO（国際労働機関）による「職業リハビリテーション及び雇用（障害者）に関する条約」（1983年）からも、身体障害者中心の傾向は他の先進諸国でも同様だったことが読み取れる。この条約は、すべての種類の障害者に対して職業リハビリテーション事業を実施するように規定するもので、一条一項に精神障害者も条約の対象である旨を明記するなど、身体障害者以外の障害者にも目を向けるよう各国に促すものであった。各国の障害者政策において、最初期からの政策の対象となっていたのは、身体障害者や子供といった、ステレオタイプな障害者像に含まれる者たちであり、健常者の抱くステレオタイプに含まれなかった多くの障害者は、彼らを対象とする施策を待たねばならなかったのである。

バーンズらは、Stigma: The Experience of Disability (Hunt 1966) を援用しながら、明るい障害者を称賛することに警告を発している。「不幸、役立たず、異なる者、抑圧されている者、病んでいる者」といった障害者の持つイメージは、一般に支持されている社会的価値との間に齟齬を引き起こす。そのような齟齬が引き起こされるのを防ぐため、障害者は健常者の目につかないところへと隔離され、社会的・物理的な恩恵を十分に得ることを否定される。非障害者が明るい障害者を特別視し、賞賛するのは、彼らがこのように恩恵を剥奪されているにもかかわらず、幸福そうでいるからである。バーンズらは、明るい障害者を称賛することは、障害が個人的な悲劇であるという見方を促進すると警告している (Barnes et al. 1999)。明るい障害者というステレオタイプは、健常者によって支持されている社会的価値を保護するように働き、結果的に、健常者の持つステレオタイプに合わない障害者たちは、典型的な障害者像によって覆い隠されてしまう。若い障害者、明るい障害者、身体障害者などがこのようなステレオタイプの例として挙げられてきた（Wendell 1997; Barnes et al. 1999）。ここにもまた、本論文で扱ったポスター・チルドレン（子供の障害者）の問題と同様、隠蔽される他者の問題がある。美しい子供の障害者たちが多くの健常者の共感を集めながらも、結果的には健常者に都合のよい障害者像の形成を後押しし、そこからあぶれてしまった障害者（典型的には、大人の障害者）の存在を隠蔽する働きをしてきたのと同様に、若い障害者、明るい障害者、身体障害者といったステレオタイプの強調は、そうでない障害者の存在を隠蔽するように働く。このように、隠蔽される他者についての議論は、本稿で主題として論じたポスター・チルドレンの問題に限らず、障害をめぐる文脈に幅広く適用することができる。

6．まとめ

本論文では、ポスター・チルドレンをめぐる問題点を、レヴィナス、デリダ、ヴァン＝マーネンの議論を参照しつつ、考察した。

レヴィナスの概念を適用することによって、ポスター・チルドレンをめぐるいくつかの論点をよく説明することができた。具体的には、なぜポスター・チルドレンが多額の寄付を集めるのか、なぜ子供がキャンペーンに起用されるのかという問いに対し、レヴィナスの概念は説明を与えてくれた。

レヴィナスの概念だけからは説明できなかった問題について、デリダとヴァン＝マーネンによる議論を参照しながら考察した。彼らの議論は、目の前の他者からの呼びかけに応えるとき、それ以外の他者をケアすることができない痛みをめぐるものであった。彼らの議論はポスター・チルドレンの問題と類似しているが、ポスター・チルドレンのケースでは、ケアされる他者と特徴を共有しない他者（大人の障害者）は、その存在自体が隠蔽され、忘れられてしまうという点が異なっていることがわかった。

目の前の他者からの呼びかけに応えるとき、私は、目の前の他者と同質な無数の他者の存在を認識し、彼らの呼びかけに応えられない痛みを感じる。しかし一方で、たとえば子供と大人のように属性の異なる他者の存在については、その存在は隠蔽されてしまう。とりわけ、ポスター・チルドレンのような容姿のよい子供を障害者の代表として扱うことには、健常者にとって共感しやすく都合のよい障害者像の形成を後押しし、健常者にとって共感しにくく都合の悪い障害者の存在を隠蔽してしまうという問題がある。

本稿で論じてきた「隠蔽される他者」をめぐる議論は、ポスター・チルドレンをめぐる問題のみならず、障害をめぐる他の多くの問題について考える際にも活用できる。たとえば身体障害者と精神障害者への支援政策の歴史的な違いについても、同様に考えることができるのであった。また、本稿の論点には、道徳的悪から病への転換という医療化のプロセスも関係していると思われるが（Conrad and Schneider 1992）、これについての詳しい検討は今後の課題としたい。

文献

【欧語文献】

Barnes, C. Mercer, G. and Shakespeare, T. (1999). *Exploring Disability: A Sociological Introduction*, Cambridge: Polity.　C. バーンズ，G. マーサー，T. シェイクスピア『ディスアビリティ・スタディーズ――イギリス障害学概論』（杉野昭博、松波めぐみ、山下幸子訳）明石書店，2004年.

Cohen, W. B. (2002). Epilogue: The European Comparison. In Friedman, L. J. and McGarvie, M. D. (ed), *Charity, Philanthoropy, and Civility in American History*, New York: Cambridge University Press, pp. 385-412.

Colley, L. (1992). *Britons: Forging the Nation 1707-1837*, New Haven: Yale University Press.

Conrad, P. and Schneider, J. W. (1992). *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness: Expanded Edition*, Philadelphia: Temple University Press. P. コンラッド，J. W. シュナイダー『逸脱と医療化』（新藤雄三、杉田聡、近藤正英訳）ミネルヴァ書房，2003年.

Derrida, J (1999). *Donner la mort*, Paris: Galilée. J. デリダ『死を与える』（広瀬浩司、林好雄訳）ちくま学芸文庫，2004年.

―― (1997). *Adieu à Emmanuel Lévinas*, Paris: Galilée. J. デリダ『アデュー ――エマニュエル・レヴィナスへ』（藤本一勇訳）岩波書店，2004年.

Lévinas, E. (1990). *Totalité et Infini: essai sur l'extériorité*, Paris: Kluwer Academic. E. レヴィナス『全体性と無限（上・下）』（熊野純彦訳）岩波文庫，2005年，2006年.

―― (1982). *Ethique et Infini*, Paris: Fayard. E. レヴィナス『倫理と無限』（西山雄二訳）ちくま学芸文庫，2010年.

Longmore, P. (2013). Heaven's Special Child; The Making of Poster Children. In Davis, L. J. (ed), *The disability studies reader 4th edition*, London: Routledge, pp.34-41.

Reno, V. P., Mashaw, J. L. and Gradison, B. (1997). *Disability: Challenges for Social Insurance, Health Care Financing & Labor Market Policy*. Washington, D.C.: National Academy of Insurance.

Van Manen, M. (2000). Moral language and pedagogical experience, *Journal of Curriculum Studies*, 32(2): 315-327.

Wendell, S. (1997). *The Rejected Body: Feminist Philosophical Reflections on Disability*, London: Routledge.

【邦語文献】

佐藤義之 (2004).『物語とレヴィナスの「顔」:「顔」からの倫理に向けて』京都：晃洋書房.

手塚直樹 (2000).『日本の障害者雇用：その歴史・現状・課題』東京：光生館.

日本障害者雇用促進協会編 (2001).『諸外国における障害者雇用対策』千葉：日本障害者雇用促進協会.

日本聖書協会 (1955).『口語訳聖書』東京：日本聖書協会.

村井尚子 (2013).「応答としてのケアの可能性と不可能性：教育責任についての試論」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』3: 203-212.